

わけですから、みんな最初はしんどかったと思います。でも今はとても楽しそうに仕事をしてくれているんです。私自身も自然農をすることで、土に、風に、雨に、太陽に、喜びと感謝の気持ちを持つことを思い出しました。法人にして本当によかったと思っています」

由井さんは現在もホメオパシーの後進育成にあたりながら、週に3日は畑に出向き、農作業に勤しんでいるという。

安心安全のために。

誰もが安心できる食べ物や化粧品をつくりたい。その想いで始めた豊受自然農の基本は、無農薬、無化学肥料、自家採取の在来・固定種を使うこと。

有機肥料はクヌギの葉、畑から出た割れた野菜、豊受自然農で飼っている牛の花子の糞、麴、椿の葉の灰。これらを発酵させてつくる。手で押してみると、まるで泉から水が沸き出るように、ポコポコと土が押し戻されてきた。生き物のように豊かでフカフカなこの肥料、畑に混ぜるのは1平方メートルあたり、たった1gなのだそう。それでもこの日収穫していたニンジン

は、在来種特有の個体差はあるものの、30cm近くある大きなニンジンが次々と収穫されていた。



「もうひとつ特徴的なのが、「アクティブプラント」を畑に散布するということです。これは75種類の野菜と果実を3年間発酵させて上澄み液をとり、レメディーを混ぜたもの。これが作物の成長を促します。9年間、失敗も重ねながら、独自の自然農にたどり着きました」

成功事例をつくること。

今年、畑に隣接した場所に、レトルトなどの加工食品の加工場が完成した。農産物の販売に加え、収穫した野菜やハーブを利用した無添加加工食品、無添加化粧品の製造などを行っているほか、JAや町と一緒に自然農ハーブ栽培

の観光名所としてのハイキネシアプロジェクトが推進中だ。

「東京から新しい土地に入っていくには、地元と手を携え、地域への貢献も考える必要があります。地場産業を生み出し、野菜だけではなく加工食品に取り組むことで、農業法人としての経営を成り立たせる道を模索していく。本来は大型農業ではなく、それぞれが自分の畑を持って自存自衛やつていくのが理想ですが、さまざまな事情で家庭菜園すらできない方々にも自然農の安心安全な食材を供給する道を開いていく。へ豊受自然農が成功事例となってどんどん真似をしてもらい、健全な食と農業の体系を生み出していけたらと思っています」

book 『いのちをつくる日本豊受自然農』

ホメオパシー出版

<豊受自然農>の指針や農法をあますことなく紹介した雑誌。野菜やハーブのつくり方から季節折々の美しい農場風景、由井寅子さんのエッセイも掲載。

762円(税別)
www.homoeopathy-books.co.jp

